

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0792000036		
法人名	社会福祉法人 厚慈会		
事業所名	グループホーム国見の丘 オリオンユニット		
所在地	福島県伊達郡国見町小坂南3番地		
自己評価作成日	R4年3月1日	評価結果市町村受理日	令和4年7月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/07/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/07/index.php</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人福島県福祉サービス振興会		
所在地	〒960-8253 福島県福島市泉字堀ノ内15番地の3		
訪問調査日	令和4年4月20日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・室内外の住環境を快適にするために折々の季節に整備している。</li> <li>・認知症のレベルに合わせた対応を工夫して行っている。</li> <li>・かかりつけ医・医療機関との連携を図り、持病の悪化を予防している。</li> </ul>
---

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 主治医と相談して精神科の服薬量の減少を図り、利用者の精神活動を薬で制限しない取り組みを行っている。ドラッグロックをしない取り組みを行うことで、転倒が少なくなる効果がみられている。</li> <li>2. 家族や知人・友人との関係を大切に、コロナ禍においても面会を制限することなく感染状況により窓ガラス越しや玄関での短時間の面会を継続してきた。新たに、玄関脇の部屋の改造を行い全面をアクリル板で仕切った面会室を設け、ゆっくり面会できるよう取り組むなど関係継続に努めている。</li> <li>3. コロナ禍においても季節の桜や紅葉を楽しむドライブなどの外出支援を行っている。また、年頭に短冊に書いた利用者の希望を実現するためにクレープ屋に出かけるなどの支援を行っている。今年度は利用者が住んでいた街中や自宅周辺をドライブする計画も予定して外出支援に取り組んでいる。</li> </ol>
--

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝の全体ミーティングで唱和し、現場では職員の目に付く場所に掲示している。法人理念・行動規範などを出勤時に確認出来るようにしている。	法人理念をもとに、地域密着型サービスの理念を踏まえた事業所理念を策定している。事務室と台所に掲示し、職員がいつでも確認できるようにして職員への浸透を図っている。また、重要事項説明書に事業所の理念や基本方針を記載し、契約時に本人や家族へ説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染対策を徹底しており、地域との交流はほとんどないが施設開所記念に打ち上げ花火を実施し、地域の方々にも喜んでいただいている。	法人として、毎年、施設開所記念として花火を打ち上げ、地域住民に楽しんでもらっている。隣接の同一法人の特別養護老人ホームの交流スペースで、歌・楽器演奏・フラダンスなどのボランティアや県警察音楽隊のイベントなどが開かれ、利用者も招かれた地域住民と交流してきたが、コロナ禍で中断している。	法人としての取り組みは見られるが、事業所自体の地域との交流が希薄である。地域密着型サービスの事業所として、コロナ収束後に向けた地域との交流の在り方の検討や取組みの実施が望まれる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	職員の専門研修参加を通して、認知症状の対処方法などを、入居者家族や入居希望をする家族に理解して貰えるよう説明している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、事業所の取組内容や具体的な改善課題がある場合にはその課題について話し合い、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービス向上に活かしている	コロナ禍のため、定期的な運営推進会議の開催が難しく、文書での報告が殆どであった。会議開催の有意性は認識しているので工夫して開催していきたい。	役場・地域包括支援センター・社会福祉協議会・婦人会会長・家族代表で構成する運営推進会議を年6回開催してきた。コロナ禍以降は、感染状況が緩和した時期に会議を開催した以外は書面開催として資料を2カ月に1回メンバーへ郵送している。	コロナ禍以降、ほとんど書面開催としているが、会議資料を送付するだけで委員の意見の把握は行っていない。委員の意見を運営に反映するために、意見をいただく工夫を行い、意見を記録にまとめて送付するなど双方向の会議となるような取り組みが望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	国見町から依頼された困難事例の対応など、自施設にとどまらず法人内で話し合いながら対応している。入退所の報告や空床状況の報告などは随時行っている。	町の福祉課長が運営推進会議のメンバーになっており、事業所の実情に精通してもらっている。日頃から、町の担当職員から入居に関する問い合わせや管理者から介護保険の運営に関する質問など、互いに電話で連絡を取り合っている。また、町から依頼され困難事例の受入れを行うなど協力関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束事例はない。認知症による危険行為は様々みられるが、拘束しなくて済むように工夫したり、見守りなどはマンパワーの活用をして事故予防をしている。発生した事例がある場合には身体拘束委員会にかけてご家族様に相談し、同意を得て行っていく。	法人全体で身体的拘束適正化委員会を月に1回開催している。事業所から職員が委員として参加している。主治医と相談して精神科の薬を減らしてドラッグロックの防止を図っている。また、言葉による拘束をしないようにカンファレンスで職員に呼びかけ、現場で管理者等がその都度、注意してスピーチロックの防止に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	虐待防止の研修に参加したり、カンファレンス等で虐待に繋がらないよう認知症高齢者の理解を含め勉強会を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修で学ぶ機会を持つことが出来ている。また、研修に参加した内容をカンファレンス等で情報共有している。また、ご家族様と面談した際に適時お伝えしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書類、重要事項説明書は入所前に丁寧に説明し、質問や不安点がないか確認しながら契約を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者様には日頃の会話内から要望を聞き出したり、ニーズを引き出せるようこまめにコミュニケーションをとるよう努めている。また、意見箱を玄関に設置している。ご家族様からの意見を聴取し、運営に反映している。	家族が面会に来てくれる機会が多いため、面会時に家族の意見を伺うようにしている。また、折に触れて、電話で話を聞くようにしている。利用者の意見は日ごろの会話を通して把握するようにしている。年頭に利用者の希望を書いた短冊を張り出し、実現できるように支援している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設内には職員用の意見箱を設置し、事業運営に反映している。	直接、職員の方から管理者へ言ってくることが多い。職員専用の意見箱を休憩室に設置し、職員の意見の把握に努めている。意見箱は法人の専務が確認し、意見を運営等に反映している。また、管理者は定期的に個人面談を行い意見等を把握し、業務に活かすように努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	同法人内に安全衛生委員会がある。定期的に会議を開催し、職員の職場環境、健康管理を目的に開催している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修に参加する機会の確保を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修等を通して同業者と交流する機会があったり、ネットワークづくりに繋がっている。		
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の性格や対人関係の持ち方に合わせたユニット選定をおこなっている。実態調査や生活歴などを確認しながらアセスメントを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前にはご家族様が困っていること、施設に入所してからはどのように過ごして欲しいかよくコミュニケーションを取り確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人に無理させないように、施設での生活に慣れてもらう工夫をしている。合わせて家族とやり取りをしながら支援内容の確認や変更を随時行っている。対応困難な事例は法人内の他職種に相談するなどの連携をとっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	時間に縛られた対応をしないように柔軟に対応している。24時間シートなどで本人の要望や見守り方の確認を行い、ケア方法の個別性を大事にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族から花の苗を頂くこともあり、施設の周りに1年中花を咲かせて、入居者もご家族も職員も楽しめるようにしている。暖かな時期にはなるべく外に出て楽しめるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族だけでなく、過去に共に働いた同僚や友人知人などに面会して頂くようにしているが、現在は窓越しの面会になっている。自宅での私物なども持ち込めるようにして、施設生活の違和感を少なくしている。	コロナ禍においても、家族だけでなく友人や知人の面会を制限しないで、窓越しの面会など感染防止に努めながら関係継続を支援している。また、昔の同僚と手紙のやりとりをしている利用者があり、関係が途切れないよう投函などの支援を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症や身体的不具合(難聴等)で入居者同士が対立する事もあるため、話し相手作りなどのきっかけ作りをしている。また、2つのユニットが各々の活動をしたり、協力して一緒に行事やレクリエーションを行ったりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	別の施設に移っても訪問したり、本人にも家族にも配慮した対応を行ってきたが、感染予防のため配慮した対応を行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の表出している訴えや日頃の様子から思いを汲み取るようにしている。ケース記録などに残して職員間で周知し、共通した対応が出来るようにしている。	利用者の日々の訴えや話を否定しないで傾聴し、思いや意向の把握に努めている。会話が困難な利用者は、表情や反応から本人本位で推測している。月1回のカンファレンスで職員間で話し合い、多角的な視点から把握するように努めている。また、ケアプランの作成時に本人や家族の意見の把握を行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用前の実態調査は看護師を含む複数名で行っている。必要時は再度家族に確認を行ったりして食い違いをなくすようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者様一人一人24時間シートを作成し、ご本人の1日の過ごし方や対応方法について随時更新し、ケアに繋げている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態の変化(認知症状やADLの変化等)に応じてケアプランを作成している。本人や家族の要望を反映する内容で作成している。	入居時は1か月の暫定プランを作成し、その後は状況に応じて期間を定めケアプランを作るようにしている。臨機応変に対応し現状に即したプランになるよう心がけ、プラン倒れにならないよう注意している。プラン作成やモニタリングはカンファレンスで職員間で話し合って実施し、利用者の状態等が安定すれば6か月ごとの見直しとしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	カルテ記録や連絡ノートなどを利用して情報共有を図っている。法人内共通のソフトで関係各所ともスムーズなやり取りが可能になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人や御家族様が望む時に柔軟な支援やサービスが受けられるようサポートしている。例えば、連携する歯科が往診に来所しているが御家族が希望すれば今までの馴染みの歯科を受診することも可能となっている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	感染対策のため最近はやや難しい現状であるが地域の警察音楽隊の方々に来所していただき、隣接する里での鑑賞会に参加され喜ばれる様子が見られた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医による往診対応の入所者には、日々の状態を伝えて連携を図っている。急変時の入院対応などもスムーズに出来ている。かかりつけ医に定期通院をしている入所者は、家族の協力を得ながら定期通院しており、医療情報を分かりやすく伝えている。	かかりつけ医、往診対応の協力医いずれかを本人・家族が選択し受診している。かかりつけ医の受診は家族の協力を得て、情報提供書で状況を伝えるなど連携を取っている。往診の場合は結果を電話などで家族に伝えている。皮膚科など専門医の受診も職員が支援して受診する等適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	本部の医務室看護師と連携し、24時間のサポートを受けられる状況。日々の入所者の状態や変化などは欠かさず報告し相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入所者の家族や入院先医療機関と連携を取りながら、早期に退院できるように適宜訪問も行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所前の相談段階や入所時、その後状態変化がある度に、丁寧な現状報告と今後予想される事態とその対処方法を説明している。地域密着型施設のため、最後まで同じ町内に居たいという本人や家族の願いを尊重した対応をしている。	看取りは行政との話し合いで法人全体で取り組む方針となっており、法人としての看取り指針を策定している。利用者・家族に不安がないよう重度化や急変時は病院や法人内特養などと連携を取って対応することを家族に説明し、納得を得て対応している。	入居時に重度化や看取りについて方針などを説明した際、本人・家族の同意書を受け取ることが望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は勉強会に参加しており、AEDの使用方法や防災訓練に参加している。急変者が出た場合のフローチャートが出来ており、看護師への連絡がスムーズに出来るようになっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的な避難訓練や地震による停電などの経験を活かして、防災用品の点検や避難経路の確認など定期的に行っている。国見町、地元消防団と連携がとれるよう防火管理者が整備している。	年2回消防署立ち会いの避難訓練をしているが、3年度はコロナで1回のみとなっている。職員から防災アンケートを取り課題を把握するようにしている。事業所は町の福祉避難所となっているが、ハザードマップ上は水害・土砂災害が想定されている。食料やコンロ、水など備蓄する他災害用品の点検も毎週行っている。現在BCP計画の策定を進めている。	職員体制が手薄になる夜間帯にすべての職員が適切な判断や対応が出来るよう想定訓練などの経験を積んでおくことが望まれる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人その方に合った声かけを行っている。その方の生活歴や声かけの工夫もカンファレンス等で情報共有している。	カンファレンスで声のかけ方、特に不穏時の声掛けを統一する取り組みをしている。排泄の確認や排泄用品の交換は尊厳を損なわないように小声や居室での対応をしている。職員同士の申し送りも部屋番号するなどプライバシーへ配慮した工夫をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃から個々にコミュニケーションをとり、本人の思いや希望を大切にして、自己決定を支えるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の24時間シートを作成し、一人ひとりの生活スタイルに合わせた支援を行っている。介護業務を押し付けないように臨機応変に対応するようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日々の身だしなみとして化粧や髪を結ったりして、気分よく過ごせるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事に関連した作業を利用者とともに職員が行い、一緒に食事を味わいながら利用者にとって食事が楽しいものになるような支援を行っている	食事レクリエーションをなるべく多く行い、入所者と一緒に食べ物を作る事により、楽しい時間を作るようにしている。この間は感染予防のため一緒に食べる事はしなかった。	ご飯、みそ汁はグループホーム各ユニットで利用者も皮むきや米研ぎなど出来る作業に参加し作っており、おかずは特養から調理されたものが届いている。行事食や手作りおやつ、月2回の選択食など利用者が食事を楽しめるよう工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取量・飲水量などは毎食チェックしている。変化があった場合は申し送り、カンファレンスなどで検討し、管理栄養士や看護師などに相談して随時対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後声掛けを行い、本人の口腔内の状態や使用している義歯に合わせた口腔ケアを行っている。また、口腔内異常時や義歯の不具合などは歯科医往診時に受診している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	24時間シートなどで本人の排尿パターンを把握し、なるべくトイレで排泄できるように促している。	オムツの利用者も昼間はトイレに定時に誘導しトイレで排泄できるよう支援している。また、排泄パターンを把握しトイレに誘導し、自立排泄につながる支援をしている。入居後適切なトイレ誘導でオムツからリハパンに改善した例も過去に見られた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入所者の便秘のパターンに合わせた排便コントロールを行っている。特定の飲み物で出る場合や飲水量を増やす事によって自然排便が得られることもあるので個々に応じて取り組むようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は週間スケジュールの中で概ね決めていたが、入所者の希望や体調に合わせて臨機応変に対応している。入浴剤等も利用して入浴を楽しめる時間にするよう工夫している。	週2回を目安に入浴支援を行っている。皮膚状態や汚染があったときはその都度シャワー浴等に対応している。入浴拒否の場合は時間や日にちを変え支援している。ゆず湯・しょうぶ湯、入浴時の傾聴等入浴を楽しむ工夫をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間のみならず、日中も休みたい時に自室で休息して頂いている。安心して休んで頂けるよう個室となっている。照明や音、室温の調整を個々の要望に合わせて行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が入所者一人ひとりの服薬状況が分かるように薬情をファイリングしている。又、個々のカルテにも入れてある。服薬方法は入所者の状態により違うため、それぞれにあった服薬方法で対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	集団レクや余暇活動、企画した行事、イベントなどに参加して頂き、なるべく多く楽しみを作るようにしている。また、日々の手作業やお手伝いなど、役割・やりがい作りになるような事も行っている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	外出支援は家族の協力のもと対応している。施設の取り組みとしては、あらかじめ出かける場所を計画して外出支援を行っている。	さくら・ハス・紅葉等季節の名所楽しむドライブで外出している。短冊に書いた利用者の希望を実現するため一緒にクレープ屋に出かけている。今年度は名所ばかりでなく、利用者の願いを取り入れ自分の街中、自宅付近などをドライブする計画も予定している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持している方はいらっしゃる。通院時に買物をしたりされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご自分で携帯電話を所有されている方は、家族や知人などに自分でかけている。手紙のやり取りをされている入所者もいる。投函などは施設で対応。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	四季や年中行事などに合わせて、共用空間の飾りつけをして楽しんで頂いている。又、室温調整や換気、照明の調整も行って落ち着いて過ごせる状態にしている。	季節ごと利用者と職員が貼り絵の共同作品を作成し掲示する等季節を感じる環境となっている。食事テーブルの他ソファコーナーもあり思い思いの場所で手作業やテレビを見るなど居心地よく過ごせている。空調で室温が保たれ清潔感のある空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースの中にもソファスペースなどゆったり過ごせる空間を作り、入所者同士がおしゃべりを楽しんだり、一緒にTV鑑賞したりする空間を作っている。また、居室は全て個室のため、訪問して話し込む姿もみられる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切に本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている	入所者の居室には、家族との思い出の品や折々の行事の写真などを貼り、馴染みのある私物を置く事で、家族と離れている寂しさを軽減する工夫をしている。	入居時に自宅からテレビ・茶筆筒・電気カーペット・家族の誕生日等記念日入りの手作りカレンダー・遺影・家族写真等思い出の品を部屋に持ち込み、自分らしい部屋作りを一緒にやり、落ち着いて過ごせるよう配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分で出来る事は行って頂けるように、入所者のADLに合わせた設えをしている。また、自室の場所に迷う方もいるので必要最小限の表示をしたり工夫している。		